

井戸尻III式期の土器を埋設する土坑について

一小諸市郷土遺跡の事例から一

桜井 秀雄

- | | |
|---------------------|--------------|
| I はじめに | IV 土器を埋設する土坑 |
| II 井戸尻III式期の土坑 | V まとめ |
| III 郷土遺跡にみられる他時期の土坑 | |

I はじめに

私は平成4年度からはじまった小諸市郷土遺跡の発掘調査及び整理作業を担当し、報告書は平成11年度に刊行された。^(註1)本遺跡からは、縄文時代早期末～前期初頭の竪穴住居跡6軒・土坑4基、縄文時代中期中葉～後期初頭の竪穴住居跡107軒・土坑462基・屋外埋甕8基・集石3基・掘立柱建物跡1基・土器集中2か所、郷土古墳群2号墳、平安時代の竪穴住居跡2軒・土坑1基、時期不明の土坑659基・ピット21基・配石1基の遺構と膨大な遺物が検出された。このように本遺跡では縄文時代中期中葉～後期初頭にかけての時期の遺構及び遺物が主体を占めている。これは井戸尻I式期～称名寺式期にかけての時期にあたり、この間、集落は継続していることが認められる。なかでも加曾利E II～III式期に集落は最盛期をむかえている。^(註2)このうち井戸尻III式期の703号土坑については発掘調査の段階から注目してきた。というのは本土坑は井戸尻III式期に特有な屈折底を有する完形土器が横位に埋設されていたのであるが、これが姿を現した日にたまたま現場に来られていた当時の青沼博之佐久調査事務所長が、「中央道建設に伴って調査した原村の居沢尾根遺跡でも井戸尻III式期にはこうした埋設した土坑がみつかっているが、それは不思議と集落のはずれにみられていた。」と指摘されたことが心にひっかかっていたからである。以来、発掘調査中の知見でもたしかに本土坑は当該期の集落の外縁部に位置しているのではないかという見通しは感じていたが、報告書が刊行されたことを受けて今回はその検証作業をあらためて行い、あわせてこうした土器を埋設する土坑の性格も考えてみたい。

II 井戸尻III式期の土坑

このような郷土遺跡であるが、このうち井戸尻III式期の遺構としては竪穴住居跡4軒と土坑3基が認められる。竪穴住居跡は11号住居跡、12号住居跡、16号住居跡、19号住居跡が該当する。これらはKグリッドを中心として比較的近接して位置している。そして今回の考察の対象となる土坑は703号土坑、242号土坑、351号土坑の3基である（図1）。以下その概略を記したい。

703号土坑 O-14グリッドに位置する。径118×116cmの円形を呈し、深さは88cmを測る。覆

土は単層である。底面には多孔石と台石が1点づつ認められ、それらの上には井戸尻III式期の屈折底を有する完形土器が横位に置かれていた。

242号土坑 K-24グリッドに位置する。径112×98cmのやや不整な円形を呈し、深さは42cm

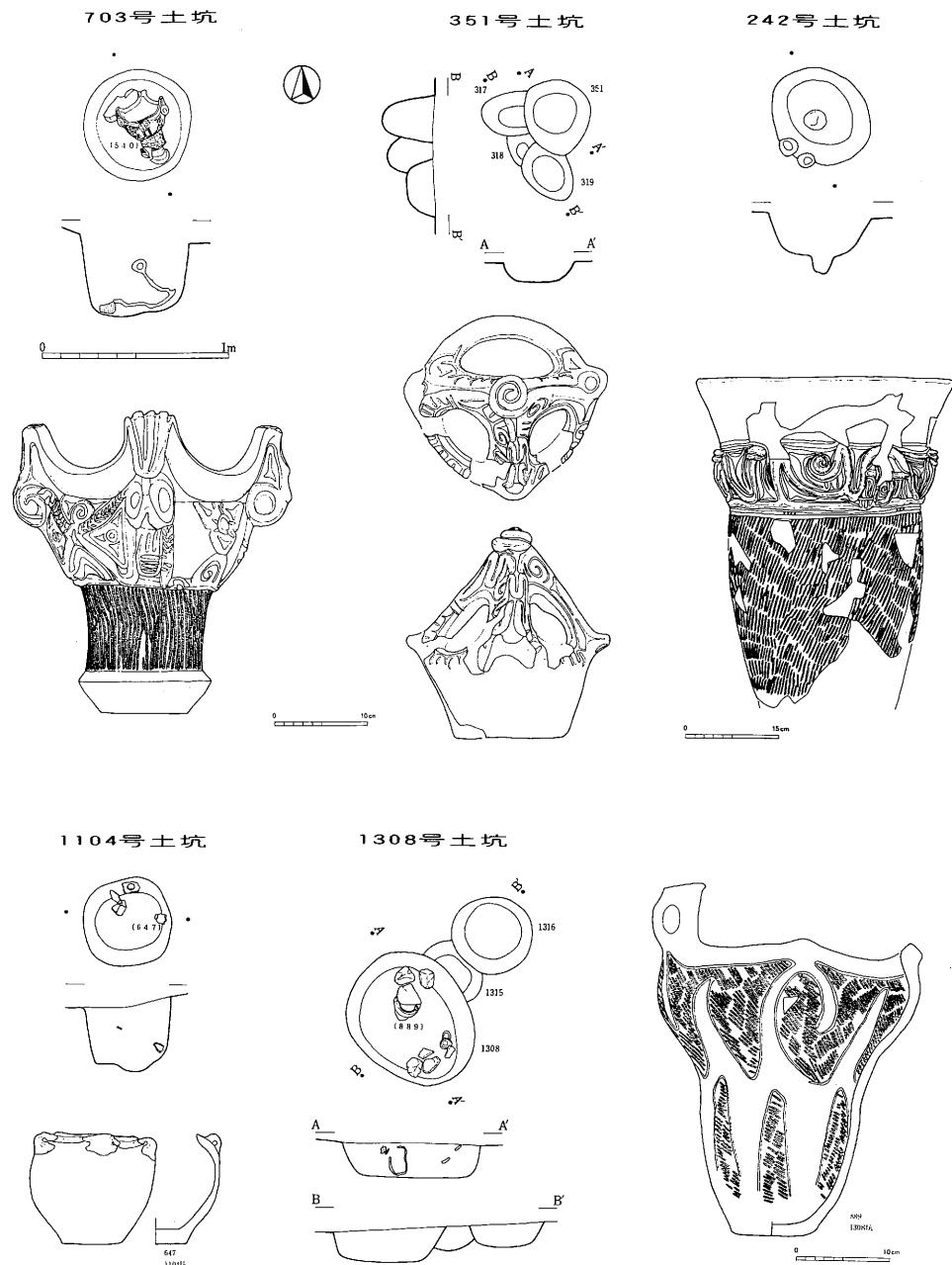


図 I 郷土遺跡の土坑と出土土器

を測る。覆土は軽石礫の有無によって2層に分けている。曾利I・加曾利E I式古段階の32号住居跡の床面で検出されたものであり、したがって32号住居跡としてとりあげてしまった破片との接合も少なくないが、主体は本土坑である。底部は欠しているが他の部位の残存度は高いといえよう。

351号土坑 P-7・12グリッドに位置する。加曾利E II式の77号住居跡及び79号住居跡の床面から検出されたものであり、また他の3基の土坑を切っている。径82×70cmの円形を呈し、深さは22cmを測る。覆土は单層である。吊手土器と打製石斧1点が出土している。吊手土器の出土状況は遺憾ながら記憶に残っていないが、復元できた吊手土器はほとんど完形に近い状態であり、他の土器片はみられないことを踏まえれば、完形の吊手土器を埋設していた可能性が高いのではないかと考えられる。

以上の3基は完形もしくは完形に近い残存度を有する土器を出土するものであるため、出土土器をもって井戸尻III式期に時期決定することに問題はないと思われる。一方で少量の土器片しか伴出しない土坑の場合はその時期を決定することには困難さを伴うが、それを考慮にいれても、これら3基の土坑の他に井戸尻III式期に比定できるものは認められていない。^(註3)

こうした事象を確認したうえで次に3基の土坑の性格について考えてみたい。まず、これら3基の土坑はほぼ完形に近い土器を埋設しているという共通点があるといえるのではなかろうか。なかでも703号土坑は出土状況及び残存状況のいずれからも完形土器を埋設したものであることが容易に理解できよう。また、出土状況が不明ではあるが、351号土坑もほぼ完形の土器に復元できることからすればこれもまた埋設されたものである可能性が高いであろう。さらに本土坑の場合は管見において他に類例を聞かない土坑内出土の吊手土器であることも意図的な埋設を感じさせるのである。一方、242号土坑から出土した土器については底部を欠しており、他の2基の土坑とは趣きをやや異とするが、他の部位の残存度は非常に高く、また32号住居跡との重複もあるうえに覆土が浅いことを考慮にいれれば、これも埋設したものと理解してもよいのではないかと思われるのである。以上のような私の理解が妥当性をもつものであるならば、井戸尻III式期にみられる3基の土器は、いずれも土器を埋設したものであるということが指摘できるのである。

III 郷土遺跡にみられる他時期の土坑

ここで視点を変えて他時期を含めて本遺跡の土坑について概観してみよう。前述の通り、本遺跡からは1125基の土坑が検出されている。このうち遺物を伴出し、時期決定が可能なものは、縄文時代早期末～前期初頭の4基、平安時代の1基、そして縄文時代中期中葉～後期初頭の462基である。ここでは縄文時代中期中葉～後期初頭の462基について考えてみたい。まず、これらの462基の土坑を遺物の出土状況に基づいて分類してみよう。

- ①完形土器を出土する土坑
- ②底部を欠した土器を正位もしくは逆位に埋設した土坑
- ③半分以上の残存度を有し、器形が復元できる土器を出土する土坑

- ④器形が復元できない土器片を多量に出土する土坑
- ⑤器形が復元できない土器片を少量出土する土坑
- ⑥石棒類・石皿・多孔石・台石・丸石を出土する土坑
- ⑦シカ角を出土する土坑

今回は以上の7つに分類してみた。ここで各類型についての説明を若干加えておきたい。まず、①からみてみよう。前節までにみた242号土坑、351号土坑、703号土坑もこれに該当するが、他には1104号土坑と1308号土坑（ともの加曾利E III式古段階）が認められる（図1）。1104号土坑は径96×96cmの円形を呈し、深さは80cmを測る。覆土は単層であるが、覆土中位から完形土器が出土した。内部にはベンガラが少量ながら認められており、ベンガラを入れたものであることがわかる。他にも土器片がみられている。1308号土坑は径150×122cmの楕円形を呈し、深さは38cmを測る。覆土上層には自然礫が数点検出されている。完形土器は正位に直立した状態で出土している。他には打製石斧1点、磨石1点、スクレイパー1点、軽石製品1点、獸骨片が検出されている。本遺跡で完形およびそれに近い土器が出土するのは以上の5基のみである。

②には3基が該当しよう。1235号土坑は径75cm程の円形を呈し、深さは32cmを測る。1284号土坑と入れ子状に重複するが、加曾利E IV式期である本跡の方が新しい。底部を欠した土器を口縁部を下にした逆位にした状態で出土している。住居内埋甕あるいは屋外埋甕である可能性も比定できないが、私は土坑として理解したい。他には打製石斧1点と獸骨片が検出されている。1255号土坑は径72×58cmの不整な円形を呈し、深さは30cmを測る。底部を欠した土器が正位の状態で検出されている。加曾利E III式古段階である。他には打製石斧3点が検出されたのみである。1339号土坑は径192×100cmの楕円形を呈し、深さは46cmを測る。覆土上層には胴部以下を欠した大形の土器が2点、口縁部を下にした逆位の状態で認められる。当初は屋外埋甕の可能性も考えたが、土層断面観察によてもその掘り方は認められないため土坑として理解したい。加曾利E III式新段階である。他には打製石斧1点、イノシシ・シカの焼骨が認められる。

③としては、1278号土坑（加曾利E III式新段階）、1283号土坑（加曾利E II式新段階）、1296号土坑（加曾利E IV式）、1299号土坑（加曾利E II式新段階）の4基があてはまろう。

④としては1125号土坑（加曾利E IV式）と1390号土坑（加曾利E IV式）が該当する。

⑤は多数に及ぶ。遺物を伴う土坑の大半はこの類型である。

⑥も多数に及ぶ。まず複数の種類を伴出するものには292号土坑（石棒類1点、石皿2点、多孔石2点、台石1点）、441号土坑（石棒類1点、石皿1点、台石1点）、1072号土坑（石皿1点、多孔石3点）、1417号土坑（石棒類1点、台石1点）の4基が認められる。また石棒類を伴出するものには778号土坑、769号土坑がみられる。石皿の出土をみるものには321号土坑、1102号土坑、1158号土坑、1304号土坑、1309号土坑、1406号土坑の6基がある。多孔石を伴出するものは312号土坑、703号土坑、717号土坑、1131号土坑、1132号土坑、1206号土坑、1209号土坑、1268号土坑、1270号土坑（3点）、1309号土坑、1310号土坑、1371号土坑、1380号土

坑がある。台石を出土するものには239号土坑、1045号土坑、1046号土坑、1198号土坑、1131号土坑、1234号土坑、1319号土坑、1269号土坑、1273号土坑、1270号土坑、1294号土坑、1275号土坑、1372号土坑、1278号土坑、1309号土坑、1380号土坑、1332号土坑の17基がある。そして丸石を出土するものには1297号土坑、1136号土坑、1394号土坑の3基がある。

⑦としては加曾利E IV式の1125号土坑が該当する。径104×94cmの円形を呈し、深さは40cmを測る。覆土上層には自然礫や軽石礫が大量に認められる。シカ角は覆土中位から検出された。土器は破片資料のみであるが7kg以上をはかる。石器としては石鏃1点、打製石斧2点などが出土している。

さて、以上のような土坑の類型を念頭にいれたうえで、あらためて井戸尻III式期にみられる土器を埋設する土坑について考えてみたい。

IV 土器を埋設する土坑

郷土遺跡の縄文中期中葉～後期初頭期の土坑のうち遺物を伴出した462基の分類を通して明

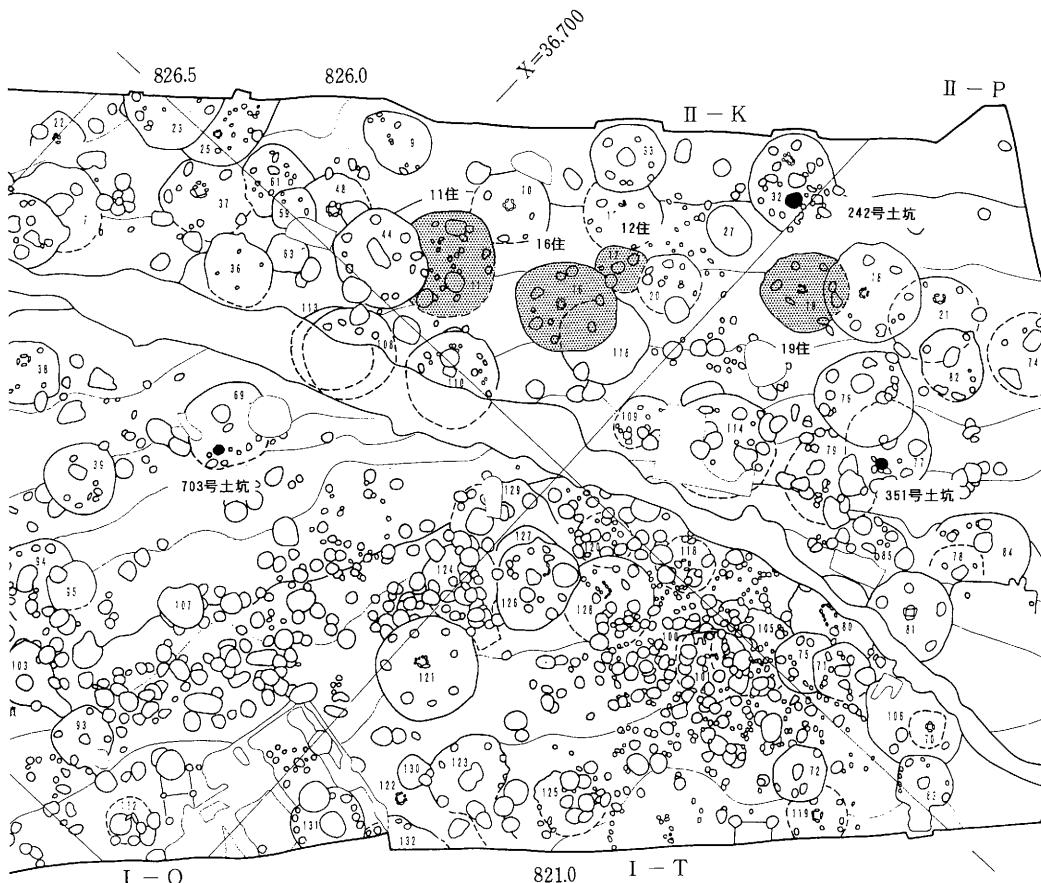


図2 郷土遺跡の井戸尻III式期の遺構

らかになってきたのは、703号土坑・242号土坑・351号土坑のように土器を埋設する土坑は、井戸尻III式期に限られるものである。完形土器を出土する土坑は他にも加曾利E III式新段階の1104号土坑と1308号土坑がみられるが、1104号土坑の場合は覆土中位からの出土であり、また他にも土器片がみられることから埋設されたものとは考えにくく、また1308号土坑の場合は墓坑と理解すべきものと私はとらえている。したがって、今回とりあげている土器を埋設した土坑の例は、こと郷土遺跡の場合は、すべて井戸尻III式期のものなのである。

次に、こうした井戸尻III式期にみられる、土器を埋設する土坑が、当該期の集落のなかでいきなる場所に位置しているかをみたい（図2）。井戸尻III式期の遺構は調査区の東側寄りに比較的近接して存在する。当該期の住居跡は4軒が認められるが、このうち12号住居跡と16号住居跡は重複しているため、少なくとも同時期に存在していたものとは考えられない。このようにすべての遺構が同時存在していたわけではないが、興味深いことには、これら4軒の住居跡を取り囲むかのように3基の土器を埋設する土坑が位置していることである。つまり、242号土坑は住居跡群の東隅に、351号土坑は南隅に、そして703号土坑は西隅にと、それぞれ外縁部に位置していることが読み取れるのである。

私はこうした事象から、これらの土器を埋設した3基の土坑は、集落の外縁部に「意図的」に配置されたものではないかと考えたい。なぜならば、ほぼ完形の土器を土坑に埋めるという作業は、相当なる意図がなければ行われない行為ではないかと私は思うからである。とりわけ351号土坑のようにそれが吊手土器である場合はその意図はなおさら顕著なのではなかろうか。そして私はそれは「集落の境界」に関する祭祀のためのものであったのではないかと推測したいのである。

このように「土器を埋設する」という意図的な行為と、集落におけるこれらの土坑の分布から推測するならば、郷土遺跡の井戸尻III式期においては、完形土器を埋設した土坑が、集落の境界祭祀において重要な役割を果たしていたのではないかという仮説が導き出されるのではないか、そしてその妥当性も高いのではないかと私は考える所以である。

ここで興味深いのは青沼氏も例に出した諏訪郡原村の居沢尾根遺跡での知見である。居沢尾根遺跡での土坑の分布状態については、「井戸尻III式期の土壙は、住居址から離れた場所に掘られる傾向が見られるのに対し、曾利I式期の土壙は住居近くに作られ、集落の外へは出ない」ことが指摘されているのである。^(註5) 居沢尾根遺跡の井戸尻III式期の土坑にも完形に近い土器を出土する例が少なからず認められており、こうした事例も看過できないものである。本遺跡の詳細な検討は後日にまわしたいが、注目すべき遺跡である。やはり、井戸尻III式期にみられる土器を埋設する土坑は、集落の境界祭祀に関係するものである可能性が高いと私は考えたい。

V まとめ

以上論じてきたことをまとめてみよう。

- (1)ほぼ完形の土器を埋設する土坑は3基が存在するが、これは井戸尻III式期のみに認められるものであり、他の時期にはみられない。

(2)集落構造の観点からすると、これらの3基の土器を埋設する土坑は井戸尻III式期の4軒の住居群の外縁部に存在し、あたかも取り囲んでいるかのような位置にある。

(3)上記の2つの事象から、これら3基の土坑を集落の境界祭祀に関するものとして理解したい。

今回は、郷土遺跡の井戸尻III式期にみられる完形土器を埋設した3基の土坑を取り上げ、それが集落の境界祭祀に関するものではないかという仮説を提示してみた。ただしこれはあくまでも郷土遺跡という1遺跡の、しかも部分的な発掘調査によって得られた知見に基づくものにすぎない。したがって今後は他遺跡の事例もとりあげ、今回導き出された仮説の妥当性をさらに検討してみたい。またこれらの土器埋設土坑が集落の境界祭祀に関するものであるとするならば、境界祭祀は井戸尻III式期以降ではどのような推移がなされていくのか、時期的な観点からも追求していきたいと考えている。さらに石棒類や石皿、丸石などを出土する土坑についても同様な視点から検証していくことが必要ではないかと考えるものである。

註

- 1 以下、郷土遺跡の引用については、桜井秀雄「第7章 郷土遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19—小諸市内3』(長野県埋蔵文化財センター、2000年)による。
- 2 郷土遺跡の縄文中期後葉の加曾利正式編年については、谷井彪ほか「縄文中期土器群の再編」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団紀要』(埼玉県埋蔵文化財調査事業団、1982年)に基づく。なお、報告書では中期は10段階に細分している。
- 3 土坑の時期決定は難しく、当該期の遺物を伴出したとしてもそれは絶対ではないであろうが、報告書では重複関係に矛盾がないかぎり出土遺物によって一応の時期に位置づけた。また遺物を出土していない土坑については今回は考察の対象から除いた。なお、50号住居跡は井戸尻式期に比定したが、細分はできなかった。ただし他の井戸尻III式期の遺構とはかなり距離が隔たっているため、たとえ井戸尻III式期であったとしても集落を別にしていた可能性が大きいだろう。
- 4 本稿では行為結果を示す「埋設」という語を用いたが、その行為が意図的なものであるとするならば「埋納」という語の方がふさわしいかもしれない。
- 5 『長野県中央自動車道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その4—』(長野県教育委員会、1981年)